農林水産委員会会議記録

農林水産委員長　　後藤　慎太郎

１　日　時

令和３年１２月１７日（金）　午前１０時３０分から
午前１１時５２分まで

２　場　所

第３委員会室

３　出席した委員の氏名

後藤慎太郎、阿部長夫、古手川正治、元吉俊博、成迫健児、守永信幸、尾島保彦

４　欠席した委員の氏名

な　し

５　出席した委員外議員の氏名

太田正美

６　出席した執行部関係者の職・氏名

地域農業振興課　地域農業班　主幹（総括）　長谷川航　ほか関係者

７　出席した参考人の職・氏名

大分大学　経済学部　地域システム学科・地域経営論
准教授　山浦陽一

８　会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

９　会議の概要及び結果

（１）農村政策の動向と県への期待について、参考人から意見聴取を行った。

１０　その他必要な事項

な　し

１１　担当書記

議事課委員会班　　主任　飛鷹真典
政策調査課政策法務班　主幹　清水恵子

農林水産委員会次第

日時：令和３年１２月１７日（金）１０：３０～
場所：第３委員会室

１　開　　会

２　参考人からの意見聴取　　１０：３０～１１：５０
「農村政策の動向と県への期待」
参考人：大分大学　経済学部　地域システム学科・地域経営論
准教授　山浦　陽一　氏

３　閉　　会

別　紙

会議の概要及び結果

後藤委員長　ただいまから、農林水産委員会を開きます。

本日は、委員外議員として、太田議員が出席しています。

まず、初めに、私から御挨拶を申し上げます。

大分大学の山浦陽一准教授には、大変お忙しい中にもかかわらず、本委員会に御出席いただき、誠にありがとうございます。委員会を代表して、厚くお礼申し上げます。

さて、本県では、挑戦と努力が報われる農林水産業の実現と、安心して暮らしていける魅力ある農山漁村づくりを基本目標として、魅力あるもうかる農林水産業の実現と農山漁村の活力創出を目指しています。

本県農業においては、近年の農業産出額や農業経営体数の減少を受けて、大分県農業非常事態宣言が発出され、現在、県と関係団体が農業システム再生に向けた行動宣言を掲げ、一丸となって本県農業の危機的状況からの脱出に向けて取り組んでいます。県議会としても、この課題解決に向けて全力で取り組む必要があります。

本日は、本県農業、農村の課題や発展の方向性などについてお聞きするとともに、今後の必要な施策等について、御意見を伺いたいと考えています。

どうぞよろしくお願いします。

それでは、委員及び委員外議員の皆さまから自己紹介をお願いします。

〔委員、委員外議員の自己紹介〕

後藤委員長　それでは、参考人から自己紹介と、引き続き、御説明をお願いします。

山浦参考人　皆さんおはようございます。大分大学経済学部の山浦陽一と申します。今日は、よろしくお願いします。

資料はどういうスタイルがいいか、いろいろ考えたんですけど、お手元にＡ４で１枚だけお渡ししています。大体これに沿ってですが、余り気にせず好きにしゃべりたいと思います。

本日の流れですが、ふだんはこういう委員会がどのように開かれているか分からないので、事務局の方にもいろいろ無理を言ったかもしれませんが、皆さんにもいろいろ御意見を伺いながら、ディスカッションをしながら進めていけたらと思っています。最初に、大学の教員は普通そこまでしないと思うんですけど、諸般の事情で多く自己紹介をさせていただいて、その後に、このシートに基づいて皆さんとディスカッションをして、時間が余ればフリーでまた話をできたらなと思います。

それでは自己紹介ですが、関連する写真を何枚かお見せしようと思います。

まず、私の出身はどこでしょうということなんですが、すいません、どうでもいい話で。この写真とは全然関係ないんですが、見てのとおり、私は東京生まれ東京育ちで親戚もみんな東京にいるんですが、そんな人間が何でここでこんな話をしているんだということを少し話したいと思います。

大分県に来て１３年目ですが、経済学部の中で農村発展論というすごい名前――自分でつけたわけじゃないんですけど、元々そういうポストがあって、そこでいろいろやっています。

大学は、多分日本で一番楽しいところと思いますが、沖縄県の琉球大学農学部に行っていました。私が卒業する年が２００１年で、ちょうど就職氷河期の真っただ中で、とても就職できる状況じゃなくて、もうちょっと遊んでいたいなということで進学しました。

東京に帰ってから、谷口先生という方がいらっしゃって、その先生の下で勉強していたんですが、東京で農業の勉強をしてもなかなかできないので、新潟県の十日町市をフィールドとして通っていました。ちょっと大分から遠いので、ぴんとこないかもしれないですが、多分、日本で一番雪が降るところで、毎年３、４メートル積もるところです。２００４年に中越地震があ

ったりして大変なところですが、そこでどういう研究をしていたかと言うと、今、限界集落とか大分でも小規模集落が増えていると思うんですが、その先ですね。無人化した――無人化と言うか、少なくとも誰も住民票を置いていない集落で、農業はどうなっているのかをずっと調べていました。実際に人は住んでいないんですけど、田んぼは残っていて、隣の集落から通っているとか、町に下りたけど上ってきているとか、そんな方が農業を続けているんですね。大変な状況でも、皆さんは農業を大事にされているんだなというのが当時印象に残っています。

基本的にはフィールドワークを中心にやっているので、現地に行って農家や行政の方と話をします。私は農業の研究をしているので、行くと農業の話ばかり聞きますが、終わってから夜に飲んでいると、農業の話ってまず出てこないんですね。今度、小学校がなくなりそうとかバスがなくなるとか、駐在所が引き上げるとか、割と生活全般についての話を伺うことが多くて。

私は農学部で農業の研究をしていたんですけど、当時は農業のことだけ言っていてもなかなか物事は前に進まないと感じていて、将来的には自分も農業だけじゃなくて、地域のことをトータルに考えないといけないと思っていました。

そう思っていたら、さっき言ったように大分大学が農村発展論ということで、農業じゃなくて農村について考える人間を探していたので、これはちょうどいいなと応募して、運よく採用されて、今につながっています。

この写真ですが、さっき言った新潟県の十日町市で、一口に農村と言っても皆さんそれぞれイメージがあると思うんですが、私の頭の中にある農村はこういう風景で、大分県もこういうところはいっぱいあると思います。

いろいろ研究しているんですが、これは私がお世話になっていた集落の集会所に貼ってあるホワイトボード。皆さんのところもあるかもしれませんが、その年、誰がどんな役をするかとよくあるやつです。見えないかもしれませんが、この年の区長は田中シゲオさんと言う方だったんですが、区長、嘱託員、評議員――田中シゲオさん。農業共済部長――田中シゲオさん。防犯協会役員――田中シゲオさん。中学校後援会役員――田中シゲオさん。流雪溝役員――この田中さんって、当時６０代半ばでまだ土建屋さんにお勤めだったんですが、高齢化が進んだ１５、６軒の集落で、もう担い手というか、こういう役の受け手がいなくてこの人に全部集中しているんですね。なので、農業の問題もあるんですけど、こういう地域の問題もトータルで考えないといけないというのが印象に残っています。

あと、さっきの集落が無人化した後どうするんだという話で、あそこの田んぼは良さそうだからと周辺の集落から通っている方も結構いるんですね。これは大分市のあるところで撮った写真ですが、皆さん農業関係の方が多いので分かると思うんですが、右と左で全然違うじゃないですか。左の草はきれいに刈ってあって、右は刈っていないんですけど、何が違うかと言うと、こっち側は地元の集落の人が耕作していて、こっち側はよそから通っている人がやっているんです。なので、どうしても畦畔の草刈りが甘くなって、この年はかなりウンカも入っていたんですけど、やっぱりそういった方の田んぼの方が、より被害が大きくて、集落の壁がまだ厳然と農村にはあって、そこを頭に入れて勉強しないといけないと思っています。

この辺も集落の関係で、これは緒方町の山にある円形分水ですが、これも昔の水争いと言うんですかね、そういうものの名残と思うんですけど、こういうのも学生に話しながらやっています。

あと、東京出身だと言ったんですけど研究は新潟でやっていて、この写真は１５年ぐらい前の新潟の離島に佐渡島がありますが、そこで撮った写真です。汚い格好をした人が写っていますけど、この帽子をかぶっているのは１５年ぐらい前の私ですが、みんな東京の人なんです。東京の人が新幹線とフェリーを乗り継いで佐渡島まで行って、１週間体育館で雑魚寝で草刈りをするという、普通に考えたら意味の分からないプロジェクトですけど、毎年参加者が２０人

ぐらいいます。

当時、だんだん高齢化が進んで農業の担い手がいないとは言われていた一方で、都会の人がこういう農業とか農村に興味を持って、どんどん入り始めているのが面白いなと思っていました。私自身もそういうのが好きなので、そういったことがもっと農家の力になればなということで研究をしていました。

あと、大分に来てからは、さきほど言ったように農業の問題だけじゃなくて、生活、暮らしの問題も考えようと、今は余りやっていないんですけど、何年間か買物の問題をやっていました。これは移動販売車ですが、横に乗せてもらって一緒に山の中を回って、どういった方が買物をされているかとか、どういう御苦労があるのかを調べていました。

最近は何をしているかというと、宇佐市はまちづくり協議会で小学校区単位のコミュニティづくりを熱心にされていますが、その皆さんにお世話になって、いろいろ勉強しています。宇佐市出身の議員も２人いるので、知り合いの方がもしかしたら写っているかもしれません。

これは深見地区ですが、多分県の補助金もいただいていたと思うんですが、廃校になった中学校を活用して、地域づくりの拠点になっています。

青いエプロンの女性は、元々は仲のいい普通の女性グループだったんですが、このまちづくり協議会がうまくサポートして、これは第１回目のワンコイン食堂の写真なんですけど、組織があることでそういう取組が生まれ始めていて、真ん中の黒い服の方も、当時は地域おこし協力隊の方なんですけど、まちづくり協議会がサポートして地元で古民家を借りて、そこを改修してカフェを運営しています。

これから田舎の地域づくりを考えていくときに、余り分野を縦割りにするんじゃなくて、そういうベースになる組織があって、そこがいろいろサポートしていく形がいいのかなと思っていて、その辺の話も後ほどしたいと思います。

あと、最近やっているのは、そういう地域のコミュニティと福祉との関係です。各地で進んでいるとは思うんですが、私が一番お世話になっているところの一つが国東市ですが、国東市も福祉の取組と地域づくりを絡めていろいろされています。

カフェをやっているところが今増えていて、普通は月に１回とか週に１回とかが多いんですが、国東市では多いところは週３回やっているんです。なので、どうやって地域の皆さんが盛り上がってきたかとか、そういうのを学ぶと、ほかの分野にも応用が利くと思っています。

ここまでが研究なんですけど、学生を現場に連れて行っていろいろやっています。

一つは、これは獅子舞なんですけど、今回が最後のお祭りだとか新聞に出たりしますが、文化の面でも今どんどん消えていっています。私らが全部それを代わることはできないんですが、少しでも元気付けられたらと、学生と一緒に地域の人と回らせてもらっています。

これも緒方町の一番山の上ですけど、馬背畑というところに県の無形民俗文化財になっている獅子舞があって、それを学生がサークルをつくって一緒にやっています。

あと、これも宇佐市ですが、ドリームファーマーズというぶどうをやっている会社があるんですが、その皆さんと仲よくさせてもらっています。ぶどうの産地ですが、荒廃園がかなり増えて再造成もかかっています。学生と地元の若手農家と一緒に、その荒廃したぶどう園の再生事業もしていました。学生は素人なので、４日間で全部ビニールをはいで草を刈って木を切ってというのを６年ぐらい前にやりました。今はもう、シャインマスカットがしっかり植わって収穫できるようになっています。

あとは、同じ宇佐市で古民家の再生事業を一緒にやったりしていますが、メインはさきほど宇佐のまちづくり協議会と言ったんですが、杵築にもずっとお邪魔していて、これは向野地区ですが、杵築市も住民自治協議会という名前でコミュニティづくりを熱心にされていて、そのお手伝いを学生と一緒にしています。

これは宇佐市の佐田川かな。これは杵築市の上地区ですかね。これは中津市の耶馬渓の深耶

馬、一目八景とかがあるところですが、ここでもお手伝いをしています。これはつい最近ですが、杵築市の八坂地区でもそういう自治協の計画づくりのお手伝いをしています。

すみません、あと個人的な、もう飽きたかもしれませんが、私は豊後大野市の緒方町に住んでいます。今の家に住んで５年ぐらいたつと思うんですが、皆さんは引っ越しを何回ぐらいされていますか。全然したことない方もいるかもしれませんが、私は今の家で１５回目です。東京が一番長かったんですけど、引っ越しが多くずっと転々としていたので、地元とか幼なじみとかが何にもないんですよ。何かそういう自分にずっとコンプレックスがあって、今住んでいる家は買ったんですが、地域の皆さんにすごくよくしていただいています。

これは地元の青年団的な組織で、ソフトボール大会に出てぼろ負けした後の懇親会です。入って２年目で事務局長をやれと言われてやらせてもらったりとか、お地蔵さんの面倒を見るのも毎年回ってくるんですけど、そういうのをやったりとか、去年は水道組合の世話人をやったりとか、大変な面もあるんですけど、私はそういうのが好きなので楽しくやっています。私以外にも何人かそういう若手の移住者がいて、ちょっとそこの雰囲気もだんだん変わってきていると思っています。

ちょっとしゃべり過ぎたかもしれませんが、以上、自己紹介でお話しさせていただきました。

本題ですが、２番のところですね。本日の趣旨と進め方を書いています。

今日はどういう話をしようかといろいろ考えたんですが、そこにあるように２０年後の農村の姿から逆算して考える農村政策という、ちょっとよく分からないことを書いています。

県全体としても目の前のことをどうするかというのもあるし、中長期的に大分県をどうしていくか皆さんも考えていると思うんですが、今日は、中長期から今を考えようというのがコンセプトになっています。

私もいろいろ県の皆さんとのお付き合いがあって、こんなことを言ったら失礼かもしれませんが、長期計画があるんですけど、そこと目の前の政策のリンクというか、そこがちょっと弱い印象があって、今日はそこをできたらと思っています。

そこに板書、双方向、意見交換、ワークショップと書いていますが、ちょっとふだんとスタイルが違うかもしれません。ホワイトボードも用意していただいたので、板書しながら皆さんにもいろいろ書いていただいたり、御発言いただきながら進めていければと思います。

あと、今日は後ろにも聞いていただいている方もいますが、こういうやり方がいいのか、もしかしたら後ろの方にもマイクを向けるかもしれないので、心の準備をお願いします。

早速ですが、３番に行きたいと思います。

２０年後の農村の集落の姿ということで書いています。副題に人口ピラミッドから考えると付けました。説明はいらないかもしれませんが、ちょっと私も専門的なことはよく分かりませんが、人口ピラミッドって普通は、例えば、こんな感じだとして左右に男女をとって下から若い人、上が年配の皆さんでそれぞれの年齢構成をグラフにするやつだと思います。

人口ピラミッドと言うぐらいなので、以前はこういう正三角形をしていたと思うんですが、この形がどう変わっていくかということです。最初に書いていますが、なぜ２０年後か。今日は２０年後と言っているんですけど、別に１０年後でもいいし３０年後でもいいかもしれませんが、私は２０年後が大事だと思っています。なぜでしょうか。私は１０年後の方が大事だとという御意見もあるかもしれません。

ちょっと皆さんマスクもされていて、なかなかお声がけしにくいんですけど、我こそはという方はいますか。ちょっとトップバッターは委員長に伺ってもいいですか。１０年後でもなく３０年後でもなく２０年後。今は２０２１年ですけど、２０４０年前後。

後藤委員長　団塊の世代がいなくなる。

山浦参考人　なるほど、確かに団塊の世代の皆さまは７０代半ばになりかかっていますが、２０年たつと９０歳以上になるので、かなりいな

くなると思います。いきなり私の考えていたことを言っていただきました。ちょっとその辺も意識しながらこのあとの話を聞いていただければと思います。

皆さんのお手元にも、同じものが２つ左右に並んでいます。このあと２０年後の話をしたいと思いますが、その前にまず、今はどうなっているんだというところから確認したいと思います。普通、ピラミッドって左右に男女ですけど、男女で別にそう形は変わらないので、片方だけ書いていただければと思います。左に現在・日本全体と書いてあって、その隣に現在・農村集落と書いています。ざっくりでいいので、今はこんな形じゃないかというのを書いていただいていいですか。ピラミッドだった時代からなので、７０年近くたっているわけですけどいかがでしょうか。

まず、日本からいきましょうか。丁寧に書くと、さっきちょっと委員長も言われたとおり、団塊の世代が日本で一番人口が多いことになるんですが、その皆さんが大体７０歳から７５歳くらいになるので、やはりそこがピークになっています。さっき書いていただいたのは、こんな感じだったり、こうかなとかあったんですけど、もう一つピークがあるんです。

今、４５歳から５０歳くらいのいわゆる団塊ジュニアの皆さんが次のピークを作っていて、日本の人口ピラミッドってこんな感じになっています。これがいいか悪いかという、これ自体もいろいろと議論ができるんですけど、ちなみに学生にもいろいろ話すんですけど、これすごくいびつなんですよね。どういびつかっていうのもいろいろあるんですけど、一つだけ言うとしたら、ここの団塊ジュニアの下の部分なんですよね。この人たちはこういう年齢ですから、本当は子どもがいっぱいいておかしくないんですけど、団塊３世――ジュニアのジュニアがいないんですよ。さっき、私が就職氷河期だと言ったんですけど、それぐらいの人たちがうまく就職できなかったりとか、非正規で賃金が低かったりしてなかなか結婚して子育てしてというのが難しいこともあって、この世代で産まれていないんです。

ちょっと今日はその話は置いておいて、問題はこっちですね。農村の集落がどうなっているかということで、大体こんな感じじゃないかという御意見だったと思います。実際は、農村でも団塊の世代が一番多いのは一緒だけど、農村ではもう一つ多い人たちがいるんですよ。大体分かると思うんですけど、その上なんですよね。

私たちは昭和一桁世代と言ってますが、今は８０代半ばから後半の人が農村にはいっぱいいて、大体こんな感じだと思います。何型かというといろいろ難しいんですけど、こっちの左側はシグマ型とか、こっちの右側は逆Ｌ字とか、そんな感じで学生には話しています。これは現実なので、今は確かにこういう形をしてるんですけど、今日の話は２０年後はどうなるのかということでした。

日本がどうなるか、農村の集落がどうなるかを、ちょっと右側の方にもう１回書いていただいていいですか。２０年たつとこの形はどう変わるのか。

２０年後なので、基本的にはさっきありましたけど、これから産まれてくる人が多いか少ないかは未来の話なので分からないですが、現在のこの形は変わらないんですね。あとは減っていくばかりなので、すごく単純に言えば、さきほど後藤委員長も言われていましたが、団塊の世代の皆さんが多く、２０年後にはこの皆さんが９０歳から９５歳になるので、さすがに、特に男性は人数が減っていくだろうということで、ざっくりとこういう形になるわけですよ。カタカナのエがちょっと下に下がるような。逆に言うと、青いこの部分の人たちが天国に行くということかなと思います。

なので、日本では団塊よりちょっと下の人たちが上の方でちょっと残っていて、ほぼこの団塊ジュニアが６５歳から７０歳の高齢者に入って人口のピークをつくるのが２０４０年頃だと。

だから２０４０問題というのは、団塊ジュニアの人たちが高齢者になって、日本の高齢化率がピークになるのが２０４０年と言われていて、日本全体で見るとそういう社会になっていくと

いうことです。

日本はいいんですけど、問題はこっちなんですよね。農村はどうなるかというと、下がどうなるか分からないですけど、ここの団塊の世代から昭和一桁の世代の人たちがほぼいなくなるので、ここの部分はこんな感じになるかなと、皆さんも大体そう書いていただいていたと思います。私のテストで２０年後のピラミッドはどうなるかと言って、こう書いたらバツです。多分こうはならないと思っていて、その辺の話をしたいと思います。

今、人口ピラミッドを書いていただきました。そのピラミッドの下の、２０年後の農村の職業・産業はというところから、皆さんとディスカッションしていきたいと思います。

皆さんは農業を御自身でされている方もいれば、いろいろサポートされている方もいると思います。２０年後に人口ピラミッドがこうなったときに、農村の農業とか産業とかがどうなるのかちょっと考えていただきたいと思います。２０年後の農業ってどうなるんでしょう。すいません、阿部副委員長いかがでしょうか。

阿部副委員長　分かりませんが、担い手がほとんどいなくなる中で法人化が進むのと、外国人の就業者が増えるんじゃないかと思います。

山浦参考人　今はコロナで止まっていますが、今の時点で海外の方がかなり増えています。法人化もいろんな分野で進んでいるので、その傾向は今後も続いていくと思います。

農業について、ほかはどうですか。県でもいろいろ進めていることがあると思いますが。

古手川委員　水田畑地化が進んでいって、近県の農業者が活躍している。

山浦参考人　それもあるかもしれません。もう一つは、今言うところの機械化とか自動化とかのスマート農業もどんどん進んで開発が続いているので、この辺がキーワードになってくると思います。ただし、基本的に皆さんの認識としても地元に人はどんどんいなくなるので、人をいっぱい使う農業は、なかなかしにくくなっていくということが言えるかと思います。

あとは、特にこのスマート農業が発展してくると、さっきも委員長が言われてましたが、大分で言えば宇佐平野とか、全国的に言えば北海道、関東、新潟とかはどんどん効率化が進むと思うんですが、さっきの棚田みたいなところで同じ技術がどんどん使えるかと言うと厳しいので、日本の国内でも生産性の格差がもっと開いてくる。今、中山間の制度って１０アール当たり２万１千円もらえますけど、これから時代が進むともっと払わないと同じ競争はできなくなるのかなと思っています。

ということで農業の話ですが、農業以外の田舎の産業はどうなるんでしょう。今の田舎の農業以外の産業って何がありますか。

尾島委員　産業はない。勤め人が多い。

守永委員　農産加工が点々と出てきていて、そういうのはいくつか残るでしょうけど。

山浦参考人　大分県でも６次産業化とか熱心にされています。関係ないですが、私も教えてもらったんですけど、６次産業化は大分県が発祥で、さすがだと思うんですが、そういう農業から派生する産業は一部残ると思います。

さきほど産業はないと言われましたが、統計で田舎の就業者がどういうお勤めをされているかを見ると、一番多いのは福祉なんです。医療、福祉が一番の産業になっています。しかし、２０年後はどうなりますか。

ここで、ちょっと思い出してもらいたいんですが、今の農村はここの人たちがいっぱいいるので、この人たち向けの介護サービスとか老人ホームがいっぱいあるわけです。だけど、２０年後はこの皆さんが上にあがってしまうので、そういったニーズと言うか必要とする人が、がたっと減るわけです。２０年後に必要とするのはその下の人たちになるので、そうなるとその医療とか福祉関係のニーズは田舎では減っていくんです。ほぼ今がピークだと言われていますが、今後は減る一方になります。

それを考えると、今この上がいっぱいいて下が少ない形になっていて、例えば、男女の左右で見ると、極端に言うとこんな形ですが、私はＴ字型と言っています。このＴの横棒の人たちが上にいくわけです。今、この人たちがいろい

ろな福祉サービスを受けたりとか、例えば、農協とか郵便局、スーパーもですけど、こういう人の生活インフラを支えられるので、この辺の人たちは農業以外で食べれているんですね。

この横棒が上にあがってしまうと、縦棒の人の仕事もなくなってしまうんです。さきほどもテストの話をしましたけど、確かに横棒がなくなったら縦棒だけになる感じがするんですが、ほっておくと縦棒すら食べていけなくなってしまうというのは考えないといけないと思います。

暗い話ばかりなんですけど、２０年後の農村はどうなるかという話なんですが、じゃあ何が残るかというと、さっきあったように、私は農業が残ると思っています。ただし、人をいっぱい使う農業は残らない。

じゃあ、どういうのが残るのか。実はおととい、県の農業賞の現地視察に連れて行っていただいて、候補者と少し話をしたんですが、ある方がおっしゃっていたのが夫婦でやっていて、基本的にはそこから大きくする気はありませんと。人がどんどん減っていく中で人を使うと大変になるので、家族で持続できる規模を目指すとおっしゃっていました。それだけが正解じゃないですが、そうだなと思いました。

そういう家族をベースにした農業は、やっぱり一番強いと思います。あとはこの加工とかですね。プラスアルファのところだし、加えれば林業とか漁業なんかも当然だし、最近であれば自然エネルギー関係ですね。こういう地域の資源をベースにした産業は引き続き残っていけるけど、繰り返しになりますが、横棒を支えるような産業は減っていくだろうというのは、私の考えとしてあります。

ということで、職業と産業についてでした。

２点目は、農業とか土地利用と書いています。土地利用はどうなるんだろうと、以前から委員長とも話をしますが、これもポイントと思っています。さっき御意見の中で、例えば、県としては畑地化を進めていますが、今の大分の農地はどれぐらいですかね、５万ヘクタールぐらいあるんですかね。それが２０年後に一体どうなっているのかなと。増えると思う人は多分いないと思うんですけど、かなり減っていく気がします。問題は、その減った農地ですよね。田んぼや畑じゃなくなるんですけれど、そういう農地ってどうなるんですかね。基本はほったらかしになって、結果的に山になると。そういうふうに現実は進んでいるし、このあと２０年ほたっておけばそうなると思います。

ちょっと言いにくいんですけど、大分県の農地を守ろうと皆さんおっしゃっているんですけど、農地じゃなくなるところがどうしても出てくるときに、じゃあそれはどうするのと。そこが十分にケアできていないんですね。とにかく農地は大事だから守りましょうと。確かにそうなんだけど、現実どんどん荒れているので、そういう支えきれない農地をどうケアするのかを考えないといけないと思うんですが、そういったところは十分手当てができていないと思っています。

まあ、どうするのかは後ほどお話ししたいと思いますが、最後に３点目です。

生活インフラというのがあります。さきほど移動購買車の話もしましたが、２０年後の田舎の生活はどうなるんだろうと。農業は残るけど、そこに住むかどうか、当然農業をされる方は住むと思うんですが、どういう生活をされるのかちょっとお考えいただければと思います。

例えば、生活をするためには買物もしないといけないし学校もないといけない、病院も必要になるし、いろんな生活インフラがあると思うんですけど、こういうのって２０年後にはどうなるんだろうということです。既に学校の統廃合は進んでいるし、Ａコープも今どんどん撤退しているし、病院も診療所を閉めますというのが私の近所でもあるんですが、いずれにしてもどんどん撤退する方向なので、生活はどんどんしにくくなると思います。

これも、ある新規就農の方が言っていましたが、自分は非常に農業に情熱を持ってやりたいんだけど、やっぱりこういったところは奥さんが非常に不安がっていて、田舎に住むという了解が得られないと。町場に住んで自分一人が山に通う形の農業をしていると言っていました。

それが別に悪いわけではないんですが、これまではそこに住んで農作業をしてというのが当たり前と思っていたんですけど、もしかしたらそのように分離し始める可能性もあるのかなと思っています。

ということで、余り明るい話は出てこないんですけど、２０年後は今あるスーパー、病院、学校はなくなると思いますが、一方では便利になる部分もあると思うんですよね。

今、特に皆さんやり始めているかもしれませんが、買物なんかはＡｍａｚｏｎとか楽天で買うようになっているし、生協の宅配とかもあるわけですが、学校も、今回コロナでオンラインの勉強がだいぶできるようになって、これは多分段々浸透してくると思います。病院も、昨日かおとといにニュースでやっていましたけど、遠隔診療をして薬をドローンで届けると。今はドクターヘリも飛んでいるけど、そういった形で大変にはなるんですが、一部、農村の不利性を解消とまでは言いませんけど、緩和するインフラも整っていくと思うので、全く人が住めないことにはならないと思います。今とはだいぶ様子が変わっていくと思いますが。

ということで、何を話していたかと言うと、２０年後の農村がどうなりそうかという話をしていました。

まず、人口から考えようということだったんですけど、農村は昭和一桁から団塊の皆さんが２０年たつとだんだん少なくなるので、それより下の縦棒世代の人たちの様子もだいぶ変わっていくだろうということでした。この横棒を支える仕事はだんだんなくなっていくので、残る仕事としては農業関係や一次産業などの地域資源に関連する産業ですね。あとは、今回コロナもあったので、いわゆるリモートとかオンラインで仕事ができる人も田舎には住めると思うんですけど、その辺の皆さんが中心に住んでいく社会になると思っています。

そういう中で土地利用ですけど、畑地化。私もいいと思うんですけど、それで今の農地を全て使い切れるのかというと、多分そこまではならないと思っていて、どうしてもやはり一部山に帰っていくところが出てきて、今のままだとそこには十分なケアはされずにほったらかして、竹やぶになるところが多いのかなという気がしています。

最後に生活インフラですが、こういったインフラはどんどんなくなっていくので、住みにくくはなるだろうと。ただ、一部オンラインのインフラも整ってきて、その辺が少し補完してくれるかなというところです。

取りあえず、今の話は理解いただけましたでしょうか。では、これを前提に大分県の農村政策をどう考えたらいいかという話に移っていきます。どうあるべきかという話をする前に、余り聞いていただきたくなかったんですけど、資料の後ろの方には今、私が大分県の農村政策に感じている違和感と言うか、課題みたいなのをそこに三つほど書いています。

まず１点目ですが、担い手政策ということで、さっきあった人はだんだん減っていくし、そういう中で何ができるか。県が進めている畑地化や法人化もそうですけど、専業・専作・系統志向って書いてますが、例えば、ピーマンとかねぎとか熱心にされていますけど、何か一つの作物をみんなで作って大市場にどんと出してと、ここのところずっとやってこられていると思います。それ自体は別に悪くないと思うんですけど、一つに集約しすぎるとちょっとリスクが大きいかなというのが一つ。

その後に多様なニーズと書いているんですけど、今、若い人たちが農業、農村に関心を持っているんですが、最初からどうしても長ねぎを作りたいとか、私は絶対ピーマンだとか言う人も中にはいると思うんですけど、都会の人は自給自足とか有機農業とか、若しくは自分で直売したいとか、そういうニーズが強いんですね。それは皆さんから見たら、そんな甘いことを言っていたら絶対無理だという御意見をいただくんですけど、少なくとも都会の人たちのニーズはそういうところにあって、そこは県として十分に拾えていない気がします。

あと、追加して言うと、新規就農に関する農業政策についてなんですが、そういったところ

は非常に熱心ですが、例えば、圃場と家がすごく離れているとか、集落営農に農地は準備してもらったけど自分は集落営農に余り参加せずに自分のことだけやっている方もいます。それは一概に悪いとは言えないとは思うんですけど、地域とのつながりのところも、もうちょっといろいろできるのかなというのは感じています。

続いて２点目で、農地利用のところです。さきほども言いましたが、農地は絶対余ってくると思うんです。だけど、そこに対するケアができてないのが気になっています。畑地化もいいと思うんですけど、基本的には水田を畑地化なので、水田って手が余りかからないんですけど、畑地化すると水田以上に手がかかる作物が多いんですよね。でも、人がいないのにより手がかかることをやって大丈夫なのかなと。そこは素朴な疑問として非常に持っています。都会から連れて行ったりもされてますが、その持続性はどうなのかが一つ気になっています。

あと、中山間地域の現実のギャップと書いていますが、畑地化というアイデアがさっき見ていただいたような棚田までいくと、やっぱりピンとこないことも多いので、そこは何かアイデアをいただけるとありがたいですが、ちょっとそこはまだ見えてこないかなと思っています。

最後にコミュニティですが、皆さんも御存じかもしれませんが、県はこのコミュニティ政策を非常に熱心にされています。県はネットワークコミュニティということで、おおいた創生推進課でサポートされています。ネットワークコミュニティという言葉は、多分大分県だけの言い方と思うんですけど、全国的には結局アルファベットなんですが、RMO（Ｒｅｇｉｏｎ Ｍａｎａｇｅｍｅｎｔ Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ）――地域運営組織と言います。こう言うとかっこいい感じなんですけど、宇佐市で言えばまちづくり協議会、杵築市であれば住民自治協議会、臼杵とか豊後大野だったら地域振興協議会とそれぞれ名前はいろいろですが、その手の組織です。

全国的に増えていますが、大分県にはいくつぐらいあると思いますか。大体、小学校区ごとに作るところが多いんですね。大分県の小学校の数。ちょっとピンとこないですかね。私も正確には知りませんが、２００を切ったくらいかなと思います。小学校が２００ぐらいとして、このRMOも小学校区単位で作るところが多いんですけど、いくつぐらいあるか。

例えば、宇佐だともう２０近くあって、先進地の一つだと思うんですけど、ほかの市でも、臼杵市はもう全部作り終わったみたいで、そういったところが出てきていて、大分県は昨年の調査では１０３あったそうです。また、今年の調査も今やっているので来月ぐらいに出ますが、小学校２００に対して１００なので、単純計算で半分ぐらいまでは広がってきています。

もっとすごいのが、市町村数で言うと大分県は１８市町村のうち１６市町村で今やっているんですね。この率は、高知県に次いで第２位なんですよ。多い少ないは市町村ごとにあるんですけど、大分県は市町村ごとに見ると、各市がそれぞれ非常にこれを進めているので、先進県の一つと言っていいと思います。こういった地域政策の取組は非常に進んでいますが、今日の話は農村政策なので、地域政策は熱心だけど農村政策はどうなのかと言うと、正直言って弱いです。それは県が悪いわけではないんですが。

農村政策と一口に言ってもいろいろあり、もう書きませんが、代表的な政策として中山間地域等直接支払制度があります。これは中山間がメインだけど、あとは平場も含めた多面的機能支払交付金という似た制度があり、この二つが国で行われています。県でも熱心にやっているんですが、ちょっと使い方がもったいないと思うところがあります。

中山間地域等直接支払制度の方もみんなでお金をうまく使えばいろんなことがやれるけど、やっぱり農業の中だけでやっているし、中山間の農地を守りましょうという制度だけど、多分県もそう言っていると思いますが、危なそうな農地は外してくださいという言い方をするんですよね。

５年間やらないといけなくて、途中で荒れると交付金の返還があるので、だから危なそうな

のは外しましょうなんですけど、本来はその危なそうな農地を守ろうという制度だったはずなんです。だけど、年々面積がどんどん減ってきているし、さっきの話ですけど、お金も別に農業以外で地域づくり全般に使えるけど、それは農業がもらったお金だからという感じでなかなか地域全体に回っていかないのももったいないと思います。

多面的機能支払交付金はちょっとお金が使いにくいので、中山間地域等直接支払制度に比べると可能性はないんですけど、ポイントは事務作業なんですね。中山間地域等直接支払制度も多面的機能支払交付金も事務作業が膨大で、地域の皆さんはこれでまいっていて、この事務作業をどうするか。特に、多面的機能支払交付金は土地改良区だったり県がやっている地域農業経営サポート機構に事務を集めて効率化したらどうかということをされています。これ自体は私もいいと思います。事務は確かに軽減されますが、こういったところに任せると、ここで止まることが多いんですよね。確かに事務はできたけど、それ以上は何もありません。

この地域内組織とかと組んで地域づくり全体がうまく回っていく使い方がもうちょっとできると思いますが、なかなかまだ縦割りがきつかったりして、そういったところの連携が進んでいないのがもったいないと思います。

ということで、いろいろ言ってきましたが、そんなこと言っても県としてやれることはやっているかもしれませんが、一番下に参考として記載しています。

これは国の政策ですけど、さっき言った農村政策ですね。国は２０年前からこの中山間地域等直接支払制度を始めて、１５年ぐらい前からこの多面的機能支払交付金を始めていますが、２０００年代はこの二つしかなかった。最初に農政は、車の両輪という言い方をしていたんですけど、実際は補助輪だったんですよね。この程度しかやってないし、担い手政策を補完する存在でしかなかったんです。２０１０年代に入ったら農林水産省は何もしないんですけど、他の省庁がどんどん農村政策を打ち始めたんですね。

２００９年だったと思いますが、地域おこし協力隊の制度が総務省から始まります。総務省は熱心で、ＲＭＯについても地方創生の流れを受けてどんどん力を入れているし、国土交通省は小さな拠点ということで言っているし、厚生労働省は介護保険と絡めて生活支援コーディネーターを派遣したりとか、そういったことで、他の省庁はどんどん地域政策をやり始めているんです。農林水産省もようやく遅ればせながら、昨年の基本計画から農村ＲＭＯとか農山漁村発イノベーションとか半農半Ｘとか、いろんなことを言い始めています。

いよいよいろいろとパーツがそろいはじめたところなので、県としてもこういった追い風を受けて、いろんなチャレンジをしていただきたいなと思っています。

どうしても言いたい事があって、じゃあ県は何をしたらいいんだということですが、この地域運営組織は総務省がやっていることで、今御説明した農村ＲＭＯは農林水産省がこれからやろうとしていることなんですね。何が違うかと言うと、農村ＲＭＯは農村と付いているので農村が対象。総務省は都市も農村も関係なくやるんで、ほとんど概念的には同じなんですね。何が違うのかと言うと、担当が違うわけですよ。農村ＲＭＯは農林水産部がやって、地域運営組織は企画振興部がやるという、ほっておくと二重になってしまうんですね。

なので、そうならないように進めていただけるとありがたいと思っていたんですけど、実は、大分県はすごいんですよ。こうならないような工夫を何年も前からしてたんですね。

どういうことかと言うと、県はネットワークコミュニティと言っていたんですけど、このネットワークコミュニティの担当者はどういう人がやっていると思いますか。中心となって担当される方がずっといて、今４代目ぐらいの方とさっきもお会いしていたんですけど、農林水産部にいる方が、企画振興部で大体２年ずつくらいこの地域運営組織の担当になるんです。ずっとそのローテーションが続いていて、私が知る

限り４代目の方なんですけど、すごくないですか。しかもその方は２年でどんどん変わっていくんですけど、また農林水産部に戻って、場合によっては中山間地域等直接支払制度とか多面的機能支払交付金といった地域政策を担当する可能性も出てくるので、せっかく今までそういう人事のローテーションをされていたので、そこをいかしていただけるといいなと思います。

実は今日、私がお付き合いを始めた初代の方が後ろにいるんです。すいません長谷川さん。長谷川さんは今、中山間の担当をされているんですよ。７、８年前はこれをやって、今はこっちにいて、こういったところで企画振興部と農林水産部で交流していただきながら、大分県の農村政策をトータルとして考えていける環境が整っているし、実際そういった話も少し進んでいるといいなと思うんです。そういったところを皆さんから働きかけていただけると、いろいろまたそこから広がっていくと思っています。

ぜひ、この地域運営組織が、県で言うネットワークコミュニティとこれから出てくるこの農村ＲＭＯと、この二つを結び付けながら中山間を活性化していくことを考えていただきたいと思っています。本当は、もうちょっとこの辺の話もしたかったんですけど、これ以上やるとやり過ぎだと思うので、今日はこの辺で一区切りつけようと思います。

ちょっとどう進めていいのか分からないまま話したんですが、何か皆さんのヒントだったり考えるきっかけになればうれしいなと思います。委員長の期待に応えられたかは微妙ですが、ありがとうございました。

太田委員外議員　農村イノベーションと半農半Ｘについて、少し話していただけませんか。

山浦参考人　先にイノベーションの話をします。

農山漁村発イノベーションなんですけど、さきほど加工の話がありました。これまでも農商工連携とか６次産業化とか、いろいろ農業から他の産業との連携の話が出たと思います。その延長線上と言うか、もっと広くやっていこうというのがこの農村イノベーションです。

なので、加工して販売して終わりじゃなくて、さっき委員長とも話したんですけど、例えば、農福連携をどうしていくかとか、観光との連携ができないかとか、エネルギーができないかとか、いろんな可能性が広がっているので、その農業、農村をベースにもっと守備範囲を広げていろんな産業をつくっていけないかと。だから、産業として農業を狭く見るんじゃなくて、もっと広くいろんなことをやっていきましょうというアイデアだそうです。

次は半農半Ｘですけど、多分２０年ぐらい前に京都の塩見さんという方が提唱された概念です。さっき書いたように、大分県へのアンチテーゼじゃないですが、やっぱり農業って専業でやるもんだとか専作でやるもんだとか、そういう考えも強いんです。

農業には興味があるけど、専業農家っていきなりは大変そうだし、自分は他にもやりたい事があるんだけどなと言う人もいます。専業でやりたい人はやってもらえばいいんですけど、もうちょっと手前で農業ばかりじゃなくて自分は組み合わせて暮らしてみたいという都会の人が結構多いんです。なので、そういう人たちをちゃんと評価して、その人たちの受皿を作っていこうと。専業農家の育成だけだとなかなか農村は支えきれないので、もっと多様な人たちをこれから増やしていこうというものです。そのために農業を支援するし、もう片方の半ＸのＸは人によって違うので、そこについても何かサポートできないかということのようです。

農村政策なので、狭く農業ではなくてですね。農村イノベーションも半農半Ｘもそうだし、手当たり次第いろんな人たちに協力してもらいながら農村を再生していこうと、農林水産省も言い始めているということです。

後藤委員長　ありがとうございました。

皆さん聞きたいこともあると思うので、お一人一つずつ、どうしてもというのがあれば端的にお願いします。

――なければ私から、先生とこれまでに人・農地プランの話を随分しました。今日の農業新聞でも書いていましたが、とうとう人・農地プランを一筆ごとにすると言い出したわけです。

それは私は正しいと思っていて、ずっとそれを本来するべきと思っていました。その人・農地プランを一筆ごとにすることによって、本当に守るべき農地と守れない農地が分かるから、それが最終的には金がかからなくていいと思うわけですよ。余計な構造改善事業とかしなくていいし。

例えば、外国人が国東半島の世界農業遺産に来たときに、荒れ果てたハウスを見てどう思うだろうと考えるし、それについて人・農地プランとの兼ね合いも含めてどう思いますか。

山浦参考人　多分ポイントは、ここはしんどいなという農地はある程度あるんですよね。出そうと思ったら出るけど、それはやっぱり持ち主がいるし、その人の気持ちを考えてどこまで周りが言えるのかが難しいのが一つ。

あとは、その人がここはもう確かに無理だから、その枠から外していいよと言える環境があるかなんです。そこから外してしまうと誰も管理をしてくれないし、さみしい山に戻ってしまうだけなので。さっき言ったように、確かに農地としてはしんどいけど、そのあとここにこういうものを植えてそれからこういう経済効果が出るとか、それで景観が良くなるとか環境が整備されるとか、やっぱりそっち側がないからみんな内側に入れとこうという話になってしまうと思うんですね。

その典型が防護柵なんですけど、じゃあ柵を張ろうというときに、うちも絶対入れといてくれみたいな話になるんです。だけど、数年たつとすぐ荒れることになって、それもやっぱり不安があるんでなるべく入れといてとなるんです。柵に入らなくても外側になると、それはそれでこういうメリットがあるというのを示していければ、そんなに変なことにはならないのかなという気はします。内側の話だけではなくて外側の話も、県でも考えていただけるといいのかなと思っています。

関連してもう一つ言ってもいいですか。今、一筆ずつ話合いをということなんですけど、多分できないところが多いんですよ。なぜかというと、それをうまくコーディネートする人がいないんです。

大分県の普及員の皆さん、他県に比べても熱心だし、心強いなと思うんですけど、それでも全集落を回って一筆一筆どうしますかみたいなところは、マンパワー的にかなり厳しいと思います。昔はかなり人がいたし、農協にも市役所にも人がいたんですけど、今はどんどん減っている中で、普及員の皆さんの負担ってかなり大きくなっている気もするし、そういういいアイデアも、現場で動かす人はいるのかというところまで考えていただけるとありがたいです。

守永委員　もう２０年以上前からだと思うんですが、長野県の飯島町辺りで農地の利用権と所有権を分離して、集落ぐるみでどう使っていくかを考えていこうというものがありました。

また、他のところではそれぞれ集落の中で土地の利用そのものを全体で話し合って、年老いた方には生きがいスペースとしてできるところでやってもらう。そういった、全体的に農地を守っていこうという考えの中でやってきたところがあって、多分、人口減少の波の中で現れているんだろうと思うんですが、その辺の何か、地域の情報をお持ちですか。

山浦参考人　飯島町のあの辺は、人もそんなに減っていないと思うんです。精密機器の工場とかもあるし、そこそこ兼業先があって安定しているみたいなんですが、それはそれで置いておいて、地域の中で、例えば、大分県内も集落営農をいっぱいつくりましたけど、ちょっとこれも言いにくいんですけど、私の印象だと立上げは皆さんすごい熱心なんですよね。

だけど、立ち上がったあとに関係機関のサポートがどこまであるのか。特に技術的なサポートはあるけど、その集落の中のコミュニケーションと言うか、そこのサポートが多分余り間に合っていない気がして。なので、一部の役員にすごい負担がかかっていて残りの人はだんだん離れていっているところのケアが多分必要だと思うんです。

そういった意味でも、さっきコミュニティの話をしたんですけど、やっぱり農業だけだとそこに限界があると思うので、そういう地域コミ

ュニティの中に農業をうまく埋め込みながら住民全体、場合によっては出ていった人も含めて地域を支えていく方向に持っていった方が、結果的に早いと思います。

太田委員外議員　地域では、高齢化で亡くなってその土地を相続しない、要は誰のものか分からない土地が山も含めていっぱいあります。それは２０年後とかには手が付けられなくなるので、やっぱり法律でその辺のことを考えていかないと地域がそれこそ運営できなくなると言うか、所有権の問題も含めてその辺がすごく今、行政も大変困っています。

　空き家対策にしても、誰が持ち主か分からないところもあるし、その辺をどう考えますか。

山浦参考人　一つ、相続放棄の仕組みが今もあり、私もしっかり勉強しておらず、来年か忘れましたがそういう土地を国に返上する仕組みが今度できるらしいです。１０年分の管理費か何かを出せば、あとは国が引き取ってくれるみたいな制度らしいですが、多分それが始まったら、すごい土地が集まってくるんじゃないかなと。

　じゃあ、それを国がどう管理していくのかと多分問われると思うんです。ほったらかしにはできないんで、何かしら手をかけていくんだと思うんですが、国が直接やるわけじゃないと思うので、それをやれるような、地域で受皿探しをやると思うんです。

　そういったときに、この農村ＲＭＯなんかが国の事業とか使ってそういう農林業を地元でやっていく法人を起こしていくとか、多分そんな流れになっていく気がします。

後藤委員長　ありがとうございました。

　本日は、大変ありがとうございました。本日伺った話を参考にさせていただき、本県農業の再生に向けて、全力で取り組んでいきたいと思います。

　お疲れさまでした。